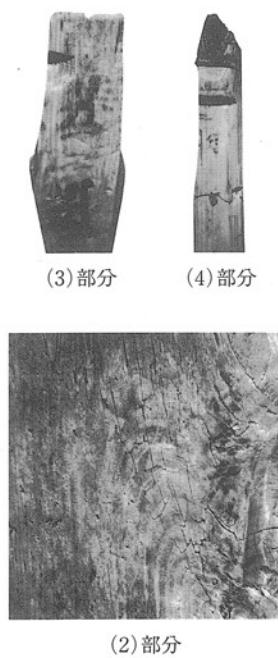


供養を行なつた人物（僧か）に該当しよう。（4）は下端を欠く中型品。梵字一字のみが確認できたが判読できない。

9 関係文献

島根県教育委員会『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区』（国道四三二号道路改築事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書IV、一〇〇七年）

（池淵俊一・平石充）



（今市）

二〇〇六年度調査で検出

島根・山持遺跡

所在地 島根県出雲市西林木町

調査期間 二〇〇六年度調査 二〇〇六年（平18）五月一～二月

発掘機関 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター

調査担当者 原田敏照

遺跡の種類 集落跡ほか

遺跡の年代 弥生時代～江戸時代

遺跡及び木簡出土遺構の概要

山持遺跡は、出雲平野の北辺、北山山系の南裾に位置し、北山から南に流れていた伊努谷川

により形成された小扇状地及びその縁辺部に位置する、弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。国道四三二号線改築事業に伴い、二〇〇〇年から発掘調査を実施している。

した主な遺構としては、古墳時代前期の土器溜まり、奈良・平安時代の道路状遺構などがある。道路状遺構は旧河道の沼状の窪みを渡るよう土橋状に造られ、人頭大の礎を路盤に大量に使用した構造である。築造工程の第一段階として杭列と横木を絡ませ、しがらみ状にしている状況も確認されている。

木簡は、道路状遺構の周辺から四点が出土した。(1)は道路築造後の道路法面に張り付くように出土した。(2)(3)は旧河道の堆積層及び道路の盛土中から出土しており、道路築造以前のものである。(4)は道路の築造後に廃棄されていた。(4)には人物が描かれており、他にも文字のない板絵が三点出土している。

板絵は旧河道の堆積層から出土し、道路築造後に廃棄されたものである。一号板絵((233)×83×6 081)は、スギの板目材で、上下両端が折損する。墨画は人物の腰の周辺部が確認され、身体の上下を装う衣服と帶の表現が認められる。三号板絵((475)×80×13 019)は、スギの板目材で、墨画は人物の頭部と身に纏つた袍の盤領の部分が確認できるのみである。四号板絵((437)×79×7 019)は、スギの板目材で、他の板絵と異なり二つ折りの状況で出土している。墨画は髷を結った女性の全身像であるが、(4)とは異なる衣装を纏つたもので、さらに、頭部の背後には頭光が描かれている。仏画である可能性が高く、女性をモチーフとした仏画であれば、吉祥天を描いたものと考えられる。また、墨書土器「国益」「益」「西

家」などが出土している。

8 木簡の釈文・内容

(1)

・「部領倉長殿

安□

倉益

馬道マ殿

福丸

□又丸

倉兄

吉野

倉長

馬道マ殿

福丸

□又丸

常吉

丸

宇丸倉長

馬道マ殿

福丸

□又丸

定吉

常

門丸

馬道マ殿

福丸

□又丸

・「□

□

□

□

馬道マ殿

福丸

□又丸

□常

□

□

馬道マ殿

福丸

□又丸

「神戸額田部□問

(2)

吉野

倉長

馬道マ殿

福丸

□又丸

「伊努郷若倭部□□」

(3)

宇丸倉長

馬道マ殿

福丸

□又丸

(4)

・「(

人

物

像

馬道マ殿

福丸

(1)

「(

伊努郷若倭部□□」

馬道マ殿

福丸

□又丸

・「

人

物

像

馬道マ殿

福丸

(2)

・「

人

物

像

馬道マ殿

福丸

(3)

・「

伊努郷若倭部□□」

馬道マ殿

福丸

□又丸

(4)

・「(

伊努郷若倭部□□」

馬道マ殿

福丸

□又丸

(1)は上端を切り折り調整により方頭状にし、下端は欠損するため不明である。スギの板目材。裏面は風化が著しい。歴名風の木簡であり、「部領倉長殿」と「馬道マ殿」のそれぞれ関わる人名が上下二段のグループに分けて記される。「倉長」は他に見えないが、倉

の管理に関係する役職名と思われる。何らかの労務管理に関わる木簡と考えられる。

(2)は上端が不明瞭であるが切り折り調整により方頭状にし、下端は欠損のため不明である。ヒノキ亜科の板目材を加工したものであり、表裏両面ともに明瞭な調整痕は認められない。地名と人名が記されているものと考えられる。(3)は上端を削り調整により方頭状に加工し、下端は付札状に尖る。下端部の文字が書かれた後に二次的に付札状に加工されているものである。ヒノキ亜科の板目材を加工したものであり、表面は削り調整、裏面は上部に削り調整が見られる。④の「神戸」と(3)の「伊努郷」は、遺跡が所在する出雲郡内の郷名である。遺跡は古代の伊努郷に所在し、神戸郷はその東側の郷名である。

(4)はスギの板目材で、表裏両面とも削りによる調整が認められる。墨画は髪を結い袍を身に纏った女性を描いたものである。文字は女性像の右腰あたりから記されている。裏面は中程の左右両辺付近が薄く削られており、その部分に表面とは天地逆に文字が記されている。

なお、木簡の釈読にあたっては、東京大学の佐藤信氏、奈良大学の東野治之氏、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

(原田敏照)

